

## [資料] 埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑 その 2

栄東高等学校\* 石黒喬大・荒井賢一・小林優介・西山享佑

### The Memorial Stones of the 1923 Kanto Earthquake in Saitama City, Saitama Prefecture: Part 2

Takahiro ISHIGURO, Ken'ichi ARAI, Yusuke KOBAYASHI, Kyosuke NISHIYAMA

Sakae-Higashi High School, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City, Saitama 337-0054, Japan

As a continued study of Ishiguro et al (2014), we have conducted the survey of the memorial stones of the 1923 Kanto Earthquake in Saitama City, and confirmed the inscriptions of the monuments in the Atago-jinja shrine, the Hisaizu-jinja shrine, the Shirahige-jinja shrine, the Oyaba-Hikawa-jinja shrine, the Daisen-in temple, and the former Japanese National Railways Omiya factory. The details of the damage, the occurrence of the aftershocks, and the restoration process are written in the monument of the Shirahige shrine. In the former Japanese National Railways Omiya factory, which is located in the place used to be called "Omiya Town", 24 people died of the collapse of the brick building. Including the result of Ishiguro et al (2014), we have found that there are 26 monuments in Saitama City, 17 of which are associated with the 1923 Kanto Earthquake, and the others of which may be related.

Keywords: Continued Study, the 1923 Kanto Earthquake, Saitama City, Memorial Stone, the Former Japanese National Railways Omiya factory

#### § 1.はじめに

関東地震は 1923(大正 12)年 9 月 1 日午前 11 時 58 分に発生し、揺れや火災、津波による大きな被害をもたらした。また、震災の混乱に伴う流言蜚語を信じた者が朝鮮人を虐殺するという痛ましい事件が起こった。震災による犠牲者の数は、宇佐美(2011)によると東京都・神奈川県・千葉県・静岡県の順に多く、それに関する石碑調査が継続的に進められている。武村(2014a)は、静岡県熱海市と伊東市に残されている地震、津波による被害に関する碑や、浸水地点を示す標識を調査し、1703 年元禄地震の教訓が活かされたのかについても議論している。また、武村(2014b)は、神奈川県内陸中部の揺れや火災による被害状況について述べ、被害に関して記された碑を調査している。埼玉県(1989)には、埼玉県下でも東京に隣接する県南部から東部にかけて大きな被害を受けたことが記されている。

石黒・他(2014)は、埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑 11 基を紹介した(一部訂正あり;石黒・他,(2015))。また、地震や震災という表記は無いが、関連する可能性を有する石碑 9 基を紹介した。前者の 11 基のうちほとんどが、その石碑の建てられている寺社や小学校の建物の被害や復興に関して記されていた。中には、当時の村内における被害の様子について述べられているものもあった。また、東京方面における被害の記述がある石碑

が 2 基あり、朝鮮人虐殺事件に関する石碑も 1 基あった。東京都や神奈川県など比較的被害が大きかった地域の石碑と比べて、さいたま市で見つかる石碑は、供養塔や慰霊碑が少なく、復興の際に建てられたものが多かった。

著者の所属校(栄東中学校・高等学校)の理科学研究部では、1923 年関東地震に関する記録(石碑や文献)の調査を、本校の生徒の多くが住んでいる埼玉県においてできないかと活動している。本稿では石黒・他(2014)に続く形で現在のさいたま市を対象とし、その後の調査で新たに見つかった 1923 年関東地震に関係する石碑を紹介する。また、石碑の紹介に先立ち、さいたま市の当時の被害概要について、市史(岩槻市役所(1985)、大宮市役所(1982, 1985)、浦和市総務部市史編さん室(1990)、与野市企画部市史編さん室(1988))に基づいて述べる。

#### § 2.さいたま市の被害

さいたま市のウェブサイト(さいたま市, 2014)によると、さいたま市は埼玉県の南東部に位置する県庁所在地で、2001 年 5 月に浦和・大宮・与野の 3 市の合併により誕生し、2003 年 4 月 1 日には全国で 13 番目の政令指定都市へと移行した。さらに、2005 年 4 月には岩槻市と合併した。図 1 に示すように 1923 年当時の町村区分はさらに細かいものだった。

本研究の対象地域の地形について中澤・遠藤

\* 〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77  
電子メール: rikaken\_sh@yahoo.co.jp



図1 石黒・他(2014)と本研究で調査した1923年関東地震に関する石碑の分布

Fig.1 Distribution of the memorial stones of the 1923 Kanto Earthquake investigated in Ishiguro et al (2014) and in this study.

表1 1923年関東地震による死者数と木造住家の被害戸数(諸井・武村(2002, 2004)より引用)

Table.1 The toll and the number of collapsed wooden houses by the 1923 Kanto Earthquake by Moroi and Takemura (2002, 2004).

計	旧浦和市 :26/42078 (0.06% 死者/人口)・443/7569 (5.85% 全潰/世帯数)												旧与野市
町村名	浦和町	六辻村	土合村	美谷本村	大門村	野田村	尾間木村	谷田村	三室村	木崎村	大久保村	与野町	
人口	9988	3920	4157	2876	2445	2537	2635	3221	2167	4467	3665	5573	
死者	3	13	0	2	0	4	1	1	0	1	1	0	
世帯数	2154	659	691	481	443	445	447	537	369	756	587	986	
全潰	26	229	16	73	19	24	38	10	0	0	8	0	
計	旧大宮市 :35/52228 (0.07% 死者/人口)・34/9933 (0.34% 全潰/世帯数)												
町村名	大宮町	日進村	三橋村	宮原村	大砂土村	指扇村	馬宮村	植水村	春岡村	七里村	片柳村	平方村	
人口	16008	4093	3426	2814	3518	4007	3378	2843	2603	2644	3776	3118	
死者	29	1	0	1	1	0	0	1	1	0	0	1	
世帯数	3699	783	641	482	586	672	536	472	441	453	618	550	
全潰	3	1	0	1	1	1	8	4	11	1	1	2	
計	旧岩槻市 :28/23259 (0.12% 死者/人口)・289/4282 (6.75% 全潰/世帯数)												
町村名	岩槻町	川通村	柏崎村	和土村	新和村	慈恩寺村	河合村						
人口	6587	2516	2433	2520	2942	3724	2537						
死者	5	8	1	2	9	1	2						
世帯数	1409	444	450	433	509	638	399						
全潰	58	107	13	11	84	11	5						

※諸井・武村(2004)によると大宮町で工場の倒壊により28名が亡くなり、それ以外の方は全潰した建物によって亡くなった。

(2002)によると、旧大宮市と旧与野市のほとんどが大宮台地に位置する。旧浦和市の北東部は大宮台地に位置し、南側は沖積層が分布する荒川低地から成る。また、旧岩槻市では、綾瀬川と元荒川による谷底低地が大宮台地を開析している。関東地震による震度に関して武村・諸井(2002)によると、旧浦和市や旧岩槻市は震度6弱から6強で、特に旧浦和市の六辻村の一部では震度7と推定されたところもあった。一方、旧与野市と旧大宮市の多くの町村では震度5弱～5強と推定されている。

表1には、旧市・旧町村毎の、1923年関東地震による死者数と木造住家の被害戸数をまとめた。当時のさいたま市内の被害概要を把握するため、関東地震の被害地域を網羅し、統一された基準のデータを作成した諸井・武村(2002)、諸井・武村(2004)から引用した。なお、死者がいなかった地域(土合村、大門村、三室村、与野町、三橋村、指扇村、馬宮村、七里村、片柳村)の人口は内閣統計局(1927)の数値を引用した。

次に、市史に基づいて当時の被害概要について述べる。旧浦和市や旧岩槻市では揺れによる住家の被害が大きく、両市とも20名以上の死者を出した(浦和市総務部市史編さん室(1990)、岩槻市役所(1985))。旧大宮市では、住家の倒壊による死者は比較的少なかったが、大宮町の工場での被害だけで28名の死者を出した(大宮市役所(1982))。一方、与野市企画部市史編さん室(1988)によると、旧与野市の被害は小さかった。また、旧与野市での当時の様子の聞き取りでは、9月1日から3日までの間に余震が109回あった、とされている。以上で引用した4つの市史にはそれぞれ、旧浦和・岩槻・与野・大宮市に京浜方面からの避難者が殺到し、救護活動が行われたことが記されている。朝鮮人虐殺事件に関して、浦和市総務部市史編さん室(1990)・岩槻市役所(1985)・与野市企画部市史編さん室(1988)によると、旧浦和・岩槻・与野市においては起こらなかったものの、混乱や自警団の行き過ぎがあった。大宮市役所(1985)によると、旧大宮市では、大宮機関庫裏(具体的な位置は不明とされている)と片柳村でそれぞれ1名が殺害されたことが報告されている。そのうち片柳村で起きた事件に関しては、石黒・他(2014)で紹介した常泉寺(図1の地点2)に建てられている石碑がそれに関わるものである。

### §3.石碑調査

ここでは、石黒・他(2014)で行った調査を継続、再調査していく中で確認した石碑を紹介する。調査は2014年8月～2015年5月の間に数回に分けて行った。

石黒・他(2014)で紹介したものにはその番号を、新しく見つかったものには引き続き20以降の番号を

付けている(石碑の分布は図1を参照)。本稿でも碑文をそのまま書くことを心がけたが、紙面の都合上縦書きのものを横書きにし、寄附者連名の個人名は省略した。また、表中の見出しについては、出身もしくは所在地、役職など寄贈者の特徴を意味している。筆者が必要と判断した箇所については解説文を載せている。／は改行される部分、■はパソコンで出なかった文字(■の右側に説明を付す)を意味する。また、異体字を最も似ている字体に、俗字を元の字に直している箇所がある。

### (3)養福寺(旧大宮市・旧三橋村)

#### 【現住所：西区三橋 6-535】

この石碑は、石黒・他(2014)を書いた当時、ビニールシートにくるみ、横にして保管されていたため、読み取ることができなかったものである。現在は、山門の前に建てられている。

(正面上段)碑文  
本堂改築記念碑

(正面下段)寄附者連名

寄附者の氏名、寄進内容が左右2列(右列5段、左列4段)にわたって記されていた。金額については、「一」「金」「圓」「也」を省略する。例えば、「一金貳百五拾圓也」は「貳百五拾」とする。総額2,226円、寄附者人数98人、平均寄附額約23円である。

見出し	寄進内容	人数	見出し	寄進内容	人数
檀徒				拾參	4
	貳百五拾	1		拾貳	1
	壹百八拾	1		拾貳	1
	壹百四拾	1		拾壹	1
	壹百	1		六	1
	七拾	1		貳	1
	六拾六	1		壹	1
	六拾五	2	■(へん:川の真ん中の棒が無いもの、つくり:言)徒		
	六拾參	1		貳拾五	1
	五拾	1		貳拾	6
	參拾四	1		拾六	1
	貳拾六	1		拾參	3
	貳拾參	1		拾貳	1
	貳拾貳	3		拾貳	1
	貳拾壹	1		拾壹	7
	貳拾	6		拾	4
	拾八	1		九	9
	拾七	9		五	3
	拾五	3		五	4
	拾五	6		參	4
	拾四	1		貳	1

祝本堂改築／(2行、行書のため判読できなかった)／扁額並書 慈寶院現董 別■(後の口が且)興衡  
(裏面上段)碑文  
大正拾四年五月竣功

(裏面下段)碑文

當山第卅四寺(1名)檀徒總代(3名)／建築委員(11名)／請負人(1名)大工棟樑(4名)木挽(2名)鳶(1名)大宮町■(がんだれの中に、上から、一・口)工(1名)



図2 養福寺に建つ石碑  
Fig.2 The monument in the Youfuku-ji temple.

石黒・他(2014)に記した養福寺の由緒により、この石碑は1923年関東地震に関する石碑と判断されている。

#### (7) 正福寺(旧岩槻市・旧新和村)

【現住所:岩槻区尾ヶ崎新田 192】

石黒・他(2014)で紹介したが、東京で被災した「岡野家」について記されていることに関して、眞々田家の方から加えてFAXにて説明して頂いたので以下に記す。

碑文中にある「岡野喜平次」氏とは眞々田馬之助氏の婿養子に行った弟である。この地に石碑があるのは、岩槻に実家があるということと境内の墓地にご先祖様が眠っているからと思われる。岡野さんは尾ヶ崎新田に多額の寄付をしており、この石を運ぶために橋を補強したという。石に刻まれている字は、浅草寺の住職の方によるものである。

#### (20) 愛宕神社(旧岩槻市・旧岩槻町)

【現住所:岩槻区本町3丁目21】

石碑は、公園に隣接した境内の階段の下にある。碑文は岩槻市役所(1984)にも記述があり、それをもとに現地での読み取りを行った。修正した箇所もある。

(正面)碑文

拝殿改築記念碑 八十六翁正八位源重浪謹書

(裏面)碑文

愛宕神社拝殿改築／をいはひ奉りて／大神乃おうかみとのを／阿らためて／つくりて千代の／記念にせ

やむ／八十六翁正八位源重浪／氏子一同／總代(5名)社掌(1名)／大正十三年十一月十日／石工田中忠次郎



図3 愛宕神社に建つ石碑  
Fig.3 The monument in the Atago-jinja shrine.

さいたま市(2007)によると、1923(大正12)年の大震災で拝殿は全潰し、1924(大正13)年11月5日再建許可、同月10日竣功、とあったため関東地震に関する石碑と判断した。

#### (21) 久伊豆神社(旧岩槻市・旧柏崎村)

【現住所:岩槻区大字谷下102番】

公園のある境内は車道に面しており、この石碑は社殿の隣に並ぶ石碑のひとつである。この石碑の碑文も岩槻市役所(1984)に記述があり、それをもとに現地での読み取りを行った。修正した箇所もある。

(正面)碑文

御大典記念社殿再築之碑／官幣大社氷川神社宮司従六位足立達謹書

(裏面上部)碑文

村社久伊豆神社修繕並拜殿再築寄附連名

(裏面下部)寄附者連名

寄附者の氏名、居住地と思われる地名、寄進内容が5段にわたって記されていた。金額については、「金」「圓」を省略する。例えば、「金參百圓」は「參百」とする。総額5,163円、寄附者人数80人、平均寄附額約65円、その他1人である。

見出し	寄進内容	人数	見出し	寄進内容	人数
	参百	3	東京市浅草区 七軒町	五拾	1
	貳百五拾	2	東京市浅草区 田島町	貳拾	1
	貳百	3	荻島村	拾五	1
	壹百八拾	4	新潟県西蒲原 郡巻中学校	拾	1
	壹百貳拾	5	岩槻町	拾	1
	壹百貳拾五	3	字加倉	五	1
	八拾六	1	大宮町	五	1
	五拾五	2	岩槻町	拾	1
	五拾参	1	北足立郡野田 村棟梁	参拾	1
	四拾	6	全副棟梁	五	1
	参拾七	1	河合村篤職	五	1
	拾	3	字加倉	拾	1
	拾	1	岩槻町石工	五	1
特別寄附			全建具職	五	1
当字	壹百五拾	1	全銅古職	五	1
	拾五	4	新和村瓦職	貳拾	1
	拾	10	全瓦職	五	1
	五	1	全全	参	1
人間郡坂戸町	壹百貳拾	1	全全	貳	2
東京市本所区 元町	壹百拾	1	全全	壹	2
東京市浅草区 聖天町	七拾	1	字加倉	五	1
新和村	唐獅子 壹■(へ ん:山と下に王, つくり:寸)	1	岩槻町	参	1
岩槻町	五拾	1	神職會	五	1

氏子惣代工事委員(7名)昭和参年拾貳月拾八日  
石工栗原竹之助

さいたま市(2007)によると、1923(大正12)年9月1日の大震災によって拝殿は全潰し、1928(昭和3)年3月28日に改築許可を受け、同年12月10日に竣功された。碑文中の「御大典」が1928年であることから、関東地震に関する石碑と判断した。



図4 久伊豆神社に建つ石碑  
Fig.4 The monument in the Hisaizu-jinja shrine.

## (22) 白髭神社(旧浦和市・旧美谷本村) 【現住所:南区松本3丁目】

この石碑はさいたま市と戸田市の市境にあるため、両市の石造物調査に掲載されなかったものと推察する。さいたま市のウェブサイト(さいたま市、2013)によると、1959(昭和34)年に戸田町の一部(南区堤外、内谷、曲本、松本)が、浦和市に編入した。

碑文中の倒壊住家72戸は、戸田市(1987)と一致

している。

## (正面上段) 碑文 震災記念碑

### (正面下段) 碑文

世界未曾有ノ震災ハ時大正十二年「紀元二千五百八十三年」九月一日午前ノ十一時五十八分關東一體ノ地ヲ震動シ瞬間ニ大廈高慶橋架軌道悉ク破ノ壊サレ死傷者數十萬屍累々トシテ交通絶ヒ物凄キニ悲憤ノ涙■(憫がさんずい)ルノノ外ナク餘震■(屢ががんだれ)々起リ屋内危険ニシテ露營ス其ノ有様ハ筆筈ニ盡シ難クノ壊塵セル家屋ヨリ猛火四散シ帝都ノ盛観モ哀レ三日ノ火炎ニ舐メ盡サノレ荒涼タル一大焦土ト化シ百萬ノ罹災民ハ焰ニ追ハレ食ニ饑ヒ住居無ノキ裡ニ不逞鮮人襲来ノ流言蜚語ニ奮起シ遂ニ自警團ヲ組織シ殘焼地域ノ維持ニ努メシカ戒嚴令行ハレ軍隊ノ出働ト共ニ其ノ秩序ハ忽チ恢復ノス畏クモ 攝政宮殿下ニハ深く御宸襟悩シ給ヒ御内帑金御下賜被為有ノ當美谷本邑ニ於テモ被害夥シク倒壊住家七十二戸内大字松本新田十四ノ戸ニシテ其ノ他建物ノ崩斜セルモノ全村ニ互ル此時鎮守白髭神社ノ社ノ殿倒潰シタルモ發起者及当字一同其他有志ノ力ニ依リ茲ニ復旧成ル所ノ以ナリ矣ノ大正十三年十月二十三日建之 應需 菅原善正 謹書

この碑文は、次のように解読できる。

世界で未曾有の震災は大正12年、紀元2583年9月1日午前11時58分、関東一帯の地面を揺らし、瞬間に大廈高楼、橋げた、線路をことごとく破壊した。死傷者は数十万で、屍は累々として、交通は途絶えた。ものごとの荒涼とした様子に悲憤の涙を流す以外はなく、余震が度々おこり屋内は危険なので野宿をしていた。その有様は筆舌に尽きず、すっかり跡形もなく壊れた家屋からは猛火が四散し、帝都の盛観も哀れなことに三日間の火災にくまなく焼き尽くされ、荒涼な一つの大きな焦土と化した。百万の罹災者は炎に追われ、食うものに飢え、住居も失った。朝鮮人襲来の流言蜚語に奮起し遂に自警団を組織し焼け残った地域の維持に努めた。戒嚴令があり、軍隊の出動と共にその秩序はたちまち回復した。恐れ多くも摂政宮殿下においては深く御心を悩まされ、財も与えて下さったのである。この美谷本村においても被害はおびただしく、倒壊住家72戸、その内大字松本新田は14戸であった。その他の建物で崩れたり傾いたりしたものが村全体に入り乱れていた。この時、鎮守白髭神社の社殿も倒潰したものの、發起者及び当地の住民一同、その他有志の力により、ここに復旧に至ったというわけである。

(裏面) 寄附者連名

寄附者の氏名, 居住地と思われる地名, 寄進内容が4段にわたって記されていた. 金額については, 「一」「金」「円」を省略する. 例えば, 「一金貳拾円」は「貳拾」とする. 総額 491.5 円, 寄附者人数 66 人, 平均寄附額約 7.4 円である.

白髭神社々殿復旧費寄附連銘

見出し	寄進内容	人数	見出し	寄進内容	人数
	貳拾	5	東京巢鴨	五	1
	拾五	2	別所材木商	五	1
	拾	6	土合村棟梁	五	1
	七	2		五	1
	八拾	1		四	2
沼影	拾	1		三	10
曲本	五	2		二	2
新曾	五	1	銅壺職	五	1
曲本	五	1	若宮	三	1
	七	3	宗岡左官	一	1
	六	1	別所建具職	一	1
	五	11		二	3
内容	五	1		一金一円五	1
元蕨	五	1		十銭	1
東京駒込	五	1		一	1

以上 發願主 幹事(3名) 大正十二年 當番(7名) 大正十三年 當番(7名) 大正十三年五月一日落成 石材彫刻師 志木町(1名)



図5 白髭神社に建つ石碑  
Fig.5 The monument in the Shirahige-jinja shrine.

(23) 大谷場氷川神社(旧浦和市・旧谷田村)

【現住所: 南区南本町 1-9-1】

JR武蔵野線・京浜東北線の南浦和駅の西口から200m程の場所にある. 2基の石灯籠が建っている. 社殿に向かって左側の石灯籠(社殿に面した側)の台座に, 次のような碑文が記されている.

(石碑中部) 碑文  
明治四十四年五月吉日

(台座) 碑文

谷田村大字大谷場 / 清宮寅松 / 建之 / 大正十二年九月一日 / 関東大震災にて倒壊 / 昭和四十六年十月復元す / 孫清宮堤助



図6 大谷場氷川神社に建つ石灯籠  
Fig.6 The stone lantern in the Oyaba-Hikawa-jinja shrine.

JR 南浦和駅周辺で複数の家屋が全壊している. また, この付近も含めた大宮台地の南縁(低地との境目)の傾斜地で, 強震動が長時間継続し, 周囲の低地と同様に被害が大きかったことが, 角田(1994)が浦和市域でおこなった関東地震による揺れのアンケート調査に示されている.

(24) 大泉院(旧浦和市・旧大久保村)

【現住所: 桜区大久保領家 363】

本堂に向かって右側に, 石碑が建てられており, 次のように記されている.

(右側面) 碑文  
与野市下落合 正野石材店

(正面上段) 碑文  
本堂落慶記念 / 三十五世 一道周三題

(正面下段) 碑文  
茂嶽山大泉院の由緒 / 当院は武蔵國足立郡菅谷北城の城主春日八郎藤原行元公の / 後えい春日下總守藤原行忠公が寛正年間に領地たる当地に草庵 / を結び春日家の守護佛釋迦牟尼如来の尊像を奉安せりと伝えられ, / 明応年間に至り嫡子春日下總守藤原行光公が大檀越となり一寺を / 建立. 当代の名僧喜庵總悦禅師を拜請して開創され茂嶽山 / 大泉院と号し曹洞宗に属す. / 四世日舜宗恵和尚は東京都多摩市に壽徳寺を, 五世喜翁良悦和 / 尚は志木市宗岡に大仙寺を, 七世超巖宇宗和尚は川越市

吉田に萬久／院を、八世含室伝宗和尚は塚本に西方寺を、九世通山宗達和尚は下／大久保に浄泉寺を、十九世海屋門船和尚は八王子に自性院を開山した。／六世久庵見良和尚の代天正十九年徳川家康公より御朱印(寺領寄／進状)を賜り以来徳川將軍十二代迄の本書現存す。又五撰家の一、九／條公家の御祈願所として明治初年まで嚴修す。／十六世湖山麟海和尚の代宝暦年間近火により堂宇咸く焼失しそ／の後本堂兼庫裡が再建され、二十五世沓淵黙韻和尚の代本堂を建立す。三十一世乾峯無坤和尚の代に觀音堂、三十二世棟随大梁和尚／の代文久二年に鐘樓堂を再建し明治六年に大本山總持寺貫首奕／堂禪師を拜請して大授戒会を嚴修、三十三世梁外随芳和尚の代／明治三十年山門を再建す。／三十四世覺道信全和尚の代大正十二年九月一日関東大震災により堂宇／に大被害ありたるも寺檀よく一致協力して復旧せり。／現董に至り昭和二十七年かつて大東亜戦争に供出された梵鐘を再鑄／し、続いて庫裡觀音堂、山門の改修をなし、昭和四十三年戒師寮を／再建し、老朽せる本堂の改築を圓成し昭和四十九年五月二十六日落慶の式典を嚴修す、同年小庫裡を建立す。／昭和五十三年十二月佛縁日／大泉三十五世現董権大教師一道周三誌／大泉院本堂建設委員／建設委員長 1 人／全副委員長 3 人／全委員(監査)2 人／全(会計)10 人／全(会計)4 人／全(監査)19 人／本堂落慶記念碑建設委員／委員長 一金五万円也 1 人／副委員長 全 1 人／全 一金參万円也 2 人／委員 全 35 人／一金七拾五万円也大泉院／昭和五十三年十一月記念碑建立

(裏面) 寄附者連名

寄附者の氏名、居住地と思われる地名、寄進内容が5段にわたって記されていた。金額については、「一」「金」「円」「也」を省略する。例えば、「一金五拾万円也」は「五拾万」とする。総額7,951万7千円、寄附者人数634人、平均寄附額約12万5,421円、その他3人である。

大泉院本堂再建費寄附者芳名

見出し	寄進内容	人数	見出し	寄進内容	人数
浦和市大字上大久保	五拾万	1		貳万	1
	四拾万	1		壹万	2
	參拾五万	1	与野大字八王子	六拾万	1
	貳拾万	7		五拾五万	1
	拾万	4		五拾万	1
	七万	1		四拾万	1
五万	6	參拾万		1	
全大字下大久保	參万	1		貳拾五万	1
	壹百万	1		貳拾万	9
	五拾万	6		拾万	5
	參拾万	4		五万	16
	貳拾五万	1		參万	10
	貳拾万	12		貳万	2
	拾五万	14		壹万	1
	拾万	20	与野市大字円阿弥	七拾万	1
	七万	9		五拾万	4
	六万	24		拾万	5
五万	13	六万		2	
壹万	1	五万		9	
全大字大久保領家	七拾万	2		參万	2
	五拾五万	1		貳万	1
	五拾万	1	与野市大字与野	四拾万	1
	參拾万	6		五万	5
	貳拾五万	4		參万	5
	貳拾万	4		貳万	3
	拾五万	6	浦和市大字榮和	參拾万	1
	拾万	2		貳拾万	2
	五万	9		拾万	1
	全大字神田	壹万	3		貳万
五拾万		1	大宮市三橋	貳拾五万	1
參拾万		1		貳拾万	1
貳拾万		2		拾万	9
拾万		5		五万	5
七万		1		參万	2
全大字白嶽	五万	1	寺直接受付分	貳百万	1
	貳万	1		五拾万	3
	八拾万	1		參拾万	5
	五拾万	3		貳拾万	13
	參拾五万	1		拾五万	2
	參拾万	3		拾万	18
	貳拾万	7		七万	3
	拾万	1		六万	1
	五万	15		五万	32
	壹万	1		五万	23
全大字在家	參仟	1		參万	26
	五拾万	3		貳万五千	3
	參拾万	1		貳万	17
	貳拾万	1		壹万	21
	拾五万	2		五仟	4
	拾万	1		參仟	1
	七万	1	沸具等指定寄付	參百万	1
	六万	3		六拾万	1
	五万	14		五拾万	3
	四万五千	1		參拾八万	1
參万	2	參拾貳万		1	
全大字宿及大字五関	拾万	1		貳拾八万	1
	五万	4		貳拾四万	1
全大字塚本	壹仟	1		貳拾万	1
	五拾五万	1		拾八万	1
	參拾五万	2		拾六万	2
	參拾五万	1		拾五万	1
	參拾万	2		拾參万	1
	貳拾万	4		拾万	4
	拾五万	2		七万	1
	拾壹万	1		五万	6
	拾万	8		參万	2
	八万	1		貳万	1
全大字塚本	七万	1		壹万	1
	六万	3		大時計壹個	1
	五万	41		幢幡壹対	1
	參万	5		大木魚の台	1

さいたま市(2005)には、大泉院の由緒追記として、「大正十二年九月一日ノ大地震ニ依リ本堂・庫裡・六地藏半潰ス」と記述されている。住職の方から、以下のようなお話を伺った。「地震によって、山門や鐘は大きく揺れていたものの、倒れることはなかった。一方で、本堂は崩れてしまったが、檀家の大工の協力も得て修復することができた。骨組みは残し、太い丸太をつかえ棒にして修復した。昭和40年代まで、その状態を保持したが、老朽化によって再建することになった。再建が決まった時点でも、元の骨組みを残して改築することを望んだ。しかし、関東地震による破損の影響もあって、耐震上それは無理との判断に至り、現在の鉄筋の本堂に再建した。」



図7 大泉院に建つ石碑  
Fig.7 The monument in the Daisen-in temple.

#### (25) 旧 国鉄大宮工場

【現住所:大宮区錦町 1017】

この石碑は大宮総合車両センターの敷地内に保管されていた。当時の旧国鉄大宮工場は、現在の大宮総合車両センターよりも広い敷地を持っていたようである。

(石碑上部) 碑文  
明治廿八年建之

(石碑下部) 碑文  
思い出の碑／この石碑は当工場創立当時旧旋盤／職場の入口に掲げられていたもので／大正十二年の関東大震災の際このよ／うに二つに割れてしまつたが創業の／形見にそのままの姿で保存されてい／たものである／顧みれば創立当時の工場作業を軌／道に乗せるまでの先人の労苦がにじ／み出ているような気がする／碑石にして心あらばこの国の鉄道／工場の技術が国外まで飛躍した頃の／繁栄に酔うた喜びも知っているである／うし敗戦の混乱に破壊しつくされよ／うとした車を眺めて悲しみに涙を止／め

得なかつた事もあつたであろう／悲喜六十年先人の歩んだ道を知る／この石に礎を置きわが大宮工場の明／るい前進への道しるべとしたい／昭和二十七年十月十四日／国鉄八十周年記念日を祝して／日本国有鉄道大宮工場長小谷秀三

大宮市役所(1982)にもあるように、旧国鉄大宮工場は1894年に業務を開始、その後工場や事務所を増やし、1927年には約74000㎡の広さを持っていた。震災当日は午前11時30分から昼休みになっており、職員は日陰を求めて休憩中だった。そこに工場の建物が崩れ落ちたり、約24mの煙突が中途から倒れたりしたため、その下敷きとなり、死者24名、負傷者21名を出した。地震によって建物や煙突が倒壊した原因は、その多くが煉瓦づくりであったため、工場の中でも鉄筋の建物は地震に耐えて作業をつづけられた。

大宮町の工場における被害として他に、4名が亡くなり、14名が負傷した旧山丸製糸工場(現山丸公園を含む一帯と考えられる)での被害が挙げられるが、それに関する石碑は見つからなかった。以上、大宮町での工場における犠牲者は合計28名であり、諸井・武村(2004)による大宮町での工場の死者28名と一致するので、工場で死者が発生した事例はこの2箇所ですべて網羅されていると考えられる。



図8 旧国鉄大宮工場に関する石碑  
Fig.8 The monument about the former Japanese National Railways Omiya factory.

#### §4.おわりに

石黒・他(2014)および本研究によって、さいたま市内では、1923年関東地震に関する石碑(17基)および関東地震に関する可能性がある石碑が合わせて、25地点で26基存在することが明らかになった。これらをまとめて、論文末尾の付表に示した。旧岩槻市内では合計11地点で12基の石碑が見つかった。特に旧岩槻市の中で、死者、倒潰数からみて最も被害の

大きかった川通村では、3 地点 4 基の石碑が見つかった。同じく被害を受けた旧浦和市は、旧岩槻市と比べて石碑が少なかったが、震災当時大きな被害を受けた地域であることは忘れてはならない。

白髭神社の石碑にもあるように、震災当時は余震の恐怖もあり野宿をした人たちの記録も多い。このような記録からも、規模の大きな地震が発生した場合に余震が後続的に発生するので注意を要することを、改めて認識できる。また、震災当時は多数の避難者により混乱や救護活動があった。時代が変わっても、このような事例も知っておく必要がある。

大きな被害を出した旧国鉄大宮工場だが、煉瓦づくりであったことが被害拡大の原因である。今でこそ耐震補強のない建物はほとんどなくなったが、このような事例があったことをしっかり受け止めなければならない。

本校理科学研究部では、今後もさいたま市以外の地域に残る 1923 年関東地震に関する石碑について調査を継続していく。石碑の無い、もしくは見つからない地域もあるため、当時の様子を知ることから調査を進めている。

## 謝辞

本研究は、公益財団法人武田科学振興財団より高等学校理科教育振興奨励に採択され、助成金を頂いて実施した。東日本旅客鉄道株式会社の遠山栄一氏や鈴木裕介氏等のご配慮により、大宮総合車両センターの敷地内の石碑を調査させて頂いた。眞々田喜久雄氏には正福寺の(勝軍寺で見つけた)石碑について丁寧に説明して頂いた。査読者の武村雅之氏と北原糸子氏、担当編集委員の金田平太郎氏には、本稿の完成に向けて、丁寧な助言を頂いた。石黒・他(2014)に引き続き、東京大学地震研究所の桑原央治氏と西山昭仁氏には論文についての助言を頂いた。栄東高等学校教諭の平原勝彦氏、栄東中学校教諭の藤井聡氏には、本稿を書くにあたってそれぞれ英文や判読に関してお手伝い頂いた。原稿の校正にあたっては、上原悠太郎氏、松田昂大氏、内保創太氏、山本朗生氏をはじめとする本校理科学研究部の部員に協力頂いた。謹んで感謝申し上げます。

対象地震：1923 年関東地震

## 文献

石黒喬大・荒井賢一・西山享佑・安倍聡志・平原優美・増田滉己・浜橋一徳・齋藤 隆・木村円香、2014, 埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震 第 29 号, 111-128.  
石黒喬大・荒井賢一・西山享佑・安倍聡志・平原優

美・増田滉己・浜橋一徳・齋藤 隆・木村円香、2015, [訂正]埼玉県さいたま市に残る 1923 年関東地震に関する石碑, 歴史地震 第 30 号, 233.

岩槻市役所, 1984, 岩槻市史 金石史料編Ⅱ 近世・近代・現代史料, 932pp.

岩槻市役所, 1985, 岩槻市史 通史編, 1192pp.

諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集, 第 2 巻, 第 3 号, 35-71.

諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923 年 9 月 1 日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 第 4 巻, 第 4 号, 21-45.

内閣統計局, 1927, 大正九年国勢調査報告, 府県の部, 第八巻埼玉県, 125pp.

中澤努・遠藤秀典, 2002, 大宮地域の地質, 地域地質研究報告:5 万分の 1 地質図幅, 産業技術総合研究所地質調査総合センター, 41pp.

大宮市役所, 1982, 大宮市史 第四巻 近代編, 1132pp.

大宮市役所, 1985, 大宮市史 別巻 1 補遺. 年表, 181pp.

埼玉県, 1989, 新編埼玉県史 通史編 6 近代, 1140pp.

さいたま市, 2005, さいたま市史料叢書 4, 寺院明細帳編 2, 204pp.

さいたま市, 2007, さいたま市史料叢書 6 社神明細帳編・寺院明細帳編・堂庵明細帳編補遺, 383pp.

さいたま市, 2013, 南区の歴史・沿革 2, <http://www.city.saitama.jp/minami/001/003/001/p003649.html>(最終閲覧 2014 年 8 月)

さいたま市, 2014, 市の歴史, <http://www.city.saitama.jp/006/012/001/007/p006217.html>(最終閲覧 2014 年 8 月)

武村雅之・諸井孝文, 2002, 地質調査所データに基づく 1923 年関東地震の詳細震度分布 その 2. 埼玉県, 日本地震工学会論文集, 第 2 巻, 第 2 号, 55-73.

武村雅之, 2014a, 静岡県熱海市・伊東市での関東大震災の跡-災害教訓は生かされてきたか?-, 歴史地震 第 29 号, 17-32.

武村雅之, 2014b, 神奈川県内陸中部での関東大震災の跡-伊勢原・厚木・海老名・綾瀬・大和・座間-, 歴史地震 第 29 号, 33-50.

戸田市, 1987, 戸田市史 通史編下, 771pp.

角田忠雄, 1994, 埼玉平野南西緑における関東地震の強振動, 埼玉大学紀要(自然科学篇), 第 29 号, 159-184.

浦和市総務部市史編さん室, 1990, 浦和市史 通史

編Ⅲ, 787pp.  
 宇佐美龍夫, 2011, 最新版 日本被害地震総覧  
 [416]-2001, 東京大学出版会, 605pp.

与野市企画部市史編さん室, 1988, 与野市史 通史  
 編 下巻, 875p

付表 石黒・他(2014)(地点1~19)および本稿(地点20~25)に記述しているさいたま市の石碑  
 リスト(番号に を付した石碑は, 石黒・他(2014)で発見し, 本稿で追加調査をした情報を記  
 述したもの)

番号	旧市名	旧村町名	現住所	石碑の所在地	備考(※1「碑銘」など)
1	大宮	大砂土村	見沼区東大宮7-36-11	砂氷川社	
2	大宮	片柳村	見沼区染谷3丁目242	常泉寺	「朝鮮人姜大興墓」(墓石)
③	大宮	三橋村	西区三橋6-535	養福寺	「本堂改築記念碑」
4	岩槻	川通村	岩槻区長宮1101	大光寺 ※2	「本堂再建銘」 「大光寺客殿庫裡再建碑」
5	岩槻	川通村	岩槻区大野島422-1	川通小学校	碑銘は書体が判読不能
6	岩槻	河合村	岩槻区日の出町9	龍門寺	大岡忠光公の墓の旧傘蓋に碑文
⑦	岩槻	新和村	岩槻区尾ヶ崎新田192	正福寺	「追善碑」 ※3
8	岩槻	新和村	岩槻区釣上469	玉泉寺	「當山再建記念碑」
9	与野	與野町	中央区上落合1-10-3	神明神社	
10	浦和	尾間木村	緑区大間木2395	水神社	
11	大宮	大砂土村	見沼区島町1086	薬王寺	「薬師堂改築記念碑」
12	大宮	片柳村	見沼区中川143	中山神社	「本社殿透塀改築記念碑」
13	大宮	七里村	見沼区東門前356	湯殿神社	「基金記念碑」
14	大宮	日進村	北区日進町2-1003	満福寺	「本堂修繕向拝新築碑」
15	大宮	指扇村	西区中釘818	秋葉神社	「社務所改築記念碑」
16	岩槻	慈恩寺村	岩槻区小溝497	長命寺	「本堂修繕記念碑」
17	岩槻	慈恩寺村	岩槻区慈恩寺733	十二天神社	「本殿拝殿改修寄附記念連名」
18	岩槻	慈恩寺村	岩槻区上野6-5-3	宝生院	「醫眼山寶生院改築記念」
19	岩槻	柏崎村	岩槻区浮谷153	浮谷神社	「浮谷神社改築寄附連名」
20	岩槻	岩槻町	岩槻区本町3丁目21	愛宕神社	「拝殿改築記念碑」
21	岩槻	柏崎村	岩槻区大字谷下102番	久伊豆神社	「御大典記念社殿再築之碑」
22	浦和	美谷本村	南区松本3丁目	白髭神社	「震災記念碑」
23	浦和	谷田村	南区南本町1-9-1	大谷場氷川神社	石灯籠に碑文
24	浦和	大久保村	桜区大久保領家363	大泉院	「本堂落慶記念」
25	大宮	大宮町	大宮区錦町1017	大宮総合車両センター 旧 国鉄大宮工場	「思い出の碑」

※1 碑銘が記されている場合には, 備考欄に「 」を付けて記述している.

※2 備考欄に記す2基の石碑が建てられている.

※3 地点7の「追善碑」は, 平成27年5月11日現在も勝軍寺(岩槻区尾ヶ崎1844・旧 尾ヶ崎村)で一時的に保管されている.

